

## 七 日本無政府共產党と改称

われわれが連盟を結成した一九三三年は、日本資本主義が、従来の軽工業中心の経済から重工業重点策へと転換した年でもあった。日本資本主義は世界的な経済恐慌から脱出するために、総ての国の資本主義と等しく戦争による恐慌克服の道を選んでいたためである。中国への侵略は既に一九三一年にはじまっていた。しかし帝国主義侵略の中核として最前線に立たせられていた青年将校は、資本主義による農村の搾取が、兵士の家庭を貧窮のどん底に陥れていることを知っ

て、国内革新の必要を痛感すると共に、財閥・独占資本と結びついている議会政治家・官僚が、天皇親政の道をふさいでいると主張する右翼思想に共鳴し、天皇制による上からの革新（維新）の断行を急務として、クーデターを企図したが失敗し、かえって軍と独占資本との結合を早めるという結果を生みだすこととなったことは前に述べた。天皇制による上からの革新こそは、日本ファシズムの本質であることを明確に暴露したのである。上からの革命は如何に善意に満ちていようとも、必ず人民を裏切り、抑圧することは歴史の証するところであった。そして天皇制は、青年将校が信じたような超階級的存在ではなく、独占資本と大土地所有制との天皇制であったからである。こうして軍需インフレーションは独占資本を救うと共に、人々の生活は窮迫の度を強め、日本ファシズムは、その姿を威圧的に現わして来たのである。

天皇制の超階級的存在という欺瞞は、強圧的に宣伝され教育された。このファシズム的攻勢、資本の攻勢の前に屈服した日本共産党の二人の巨頭、佐野学と鍋山貞親とは、有名な転向声明を発表して、革命的勢力と労働階級とに殆んど致命的と言っているほどの打撃を与えたが、これもまた天皇制の超階級性という欺瞞に助けられていたのである。共産党の組織的な抵抗は潰滅し、転向は日常茶飯事となり、遂に戦争に反対する力を失った。唯一つ、革命的勢力として残っていたのはアナキストだった。

ファシズムの動向という馬車に乗り遅れるのを恐れた無産政党と労働組合の右翼幹部は、急い

で愛国労働運動を唱えだし、のちにはナチスの労働戦線を真似た産業報国会の幹部や走り奴となつた。彼らが最初に行なつたのはメーデーを分裂させることだつた。

ヒットラーが政権を獲得したのもこの年であつた。ヒットラーはアナキストから共産党、社会民主党から自由主義者に至るまで、そしてユダヤ人へ狂暴に襲いかかり、投獄し殺害した。そして日本ファシズムはやがて、ナチスの強制収容所、有名なアウシュヴィッツを含む収容所を真似て、治安維持法のなかへ予防拘禁制度を濫り込ませるのである。逮捕をまぬがれた人々はドイツから身を以つて逃がれてフランスへ、南北アメリカへ亡命した。こうしてアナルコ・サンジカリスト・インターナショナルの組織である国際労働者協会はスペインへ移つた。スペインではアナキスト、アナルコ・サンジカリストが人民革命のなかで、強力に戦つていた。そして人民の革命だけがファシズムと戦うことができることを示していた。この革命が世界に吹き荒れて来たファシズムの最も強力な防波堤であつたが、スターリンの上からの革命への信念にそぐわなかつた。こうして革命は圧殺されて、単なる戦争と化した。

このような情勢に対して新居格らの学芸自由同盟や労働組合によつて組織された反ナチス・ファシショ粉砕同盟が結成されたが、軍と重工業資本との強烈な戦争煽動に抗することができなかつたのである。

引き続き中央委員会の会合は私の部屋で行なわれていた。二見は私のつくつた金を持って神戸へ行つた。彼は株式の短期取り引きが少額の資金を短期間に大きくする方法だと主張していたのであつた。中央委員会は二見の欠席のまま、週一回開かれていた。

一九三四年の一月に、自連新聞の元発行署名人木村英二郎が大阪へ行つて発病した。そして二見と鷹樹寿之介（菊岡久利）が木村をつれて帰つて来た。連れ戻したが病人の彼を寝かす処がなかつた。やむを得ず私は自室に一晚泊めて、翌日植村の家へ連れて行つた。私の部屋よりは間敷があつたからである。木村は毎日三田の奥山先生の処へ治療してもらいに通つたが、帰りには私の家へ寄つて行くのである。そんな訳で私の部屋に多くの人が出入りするようになった。こんな突発事のため私の部屋は会合には使えなくなつた。二見は資金をすっかり失つてしまった責任を感じていた。連盟は結成したもの、何も出来ない状況で、焦燥感が各人を捕え、スランプに陥つた。一九三四年一月三十日の第七回中央委員会には珍しく植村が欠席した。

会議は四名で開会した。植村の欠席の理由はわからなかつたが、四名には一種のショックを与えた。無断で欠席するとは怪しからんということにはなつたが、もう一度われわれは緊張を取り戻そうと申し合わせた。連盟という名称は、われわれがこの革命団体の組織に採用した中央集権組織にはふさわしくないもので、よりふさわしい名称に改めよう。部の数も人員に比べて多すぎるからまとめられるものはまとめてしまおうではないか。という話になつて名称は党とすることにきめた。こうして連盟を日本無政府共産党と改称することになつたのである。党という名称が必

ずしも中央集権組織を意味しないとしても、連合主義を意味する連盟よりはふさわしいと思えたのである。これと同時に現在の中央委員会は執行機関であるから、これを中央執行委員会と改めた。そして各専門の部は廃止して、新しく書記局、政治局、組織局、軍事局、資金局（のちに財政局と改称した）を置き、その他に新たにテロリズム活動等の特殊任務を遂行する機関として特務機関を置くことにしたのである。

のちに党規約の作成の際、中央委員会を協議機関として復活させることになる。

各局の分担は次の通りにきめた。

書記局責任者 寺尾 実

政治局責任者 植村諱聞

組織局責任者 相沢尚夫

軍事局責任者 入江 汎

資金局及特務機関責任者 二見敏雄

植村が欠席していたので、この決定は二見から植村に伝えて植村が賛成した時、満場一致の決定とみなすことにしたのである。多数決で少数意見を圧迫するという慣習はわれわれにはなかったのである。

この時も入江は党員の獲得を主張したが、二見は敢えて反対しなかった。人選は一応組織局で

行なうことにきめた。

党改称をきめた中執の直後に寺尾除名ということが起ったのである。寺尾はリヤク屋だった。リヤク屋必ずしも悪いという訳ではなかったが、組合関係の同志からは好感を持たれてはいなかった。そんな関係もあったためか、彼が出席した自連の会合の様子が、忽ち出席しなかった者の耳にはいるという噂が、われわれの間にも伝えられてきた。噂は事実であった。しかしそれはリヤク屋らしい早耳を誇示するという他愛のないもの様であった。しかし危険なことは危険であった。危険なものを取り除くにしくはない。これが四名の結論だった。除名を決定したが、これを寺尾に伝えても何の効もないことは明らかだった。多分彼には殆んど痛痒はない代りに却ってわれわれの危険は増大すると考えられた。詮方なく、党は解散したと伝えることによって彼を外すことにした。私が彼にこのことを伝える行くと、彼は少しも反対しないで、むしろ解放された安堵感をおぼえたように見受けられた。私は彼を除名した心苦しさから救われた。

寺尾を除名したので、各局の責任者を変更しない訳にはゆかなかった。

書記局責任者 相沢尚夫

政治局責任者 植村諱聞

組織局責任者 入江 汎

軍事局責任者 入江 汎

それと共に党の拡大強化を積極的に推進することを再確認した。その頃はまだ党の綱領も規約もなかったもので、これを作成しようということになった。

私は黨員候補者として梅本英三、伊藤悦太郎、山口安二、田所茂雄を推せんしていた。私が彼らと一番密接な関係があるという理由で、彼らを説得することになった。

最初に会ったのは梅本であった。彼は印刷工であって東京印刷工組合員として積極的に活動していた。同時に全国自連の中心人物であったし、自由連合新聞の編集メンバーにもなっていた。闘士とは思えぬほどの静かな男だったが、メーデー実行委員会などの、他系統の組合との協議などに出席すると、自説を主張して一步も譲らない強さがあった。しかしそれでいて敵を作るというアクの強さはなかったので、彼が代表として出席することは、他系統の組合代表者からも、会議の進行がスムーズになると歓迎された。自連の代表として出席する者のうちには、会議を停滞させたり、決裂させたりする者が多かったので、毛嫌いされがちだったのである。

前に述べたように私は彼とは革命団体の結成については話合って来た仲だったので、革命団体が出来ているから加わらないかと話をする、すぐ承知した。行動する団体であり、合法法組織だから中央集権制をとっていると話しても、反対しなかった。当時、自由連合主義という名によ

る運動態度上の弊害を改めようという意欲が切実なものだったからであると思う。

次に私は伊藤悦太郎に会った。神田の三省堂の前の喫茶店だったと記憶している。彼とは此処でよくコーヒーを飲んだ。彼は席に着くと「話って何だ？」と訊ねた。

私が革命団体の必要性を強調し、その革命団体は今までのわれわれのようにルーズな生活態度、運動態度は許されない戦闘組織でなくてはならない。戦闘に司令部が必要なように司令部を持った組織、つまり中央集権組織を採用しているということを説明すると、彼はフンフンと言いながら聞いていたが反対はしなかった。私が入党を勧めると、

「はいてもいいが、一体誰と誰が加わっているんだ？」と当然なことを訊ねた。

「それは今言えないんだ」

するとしばらく黙っていたが、

「あなたは加わっているんだろう。それなら加わろう」と笑って言った。

彼は酒田の瓦職人だった。文学青年でもあった。しかしそのことには触れたがらなかった。時には詩を作ったりしていたらしいが、私には見せたことはなかった。上京して全国自連の事務所泊り込んで組合運動に駆け廻っているうちに、自由連合新聞の編集を手伝うようになった。自由連合新聞社から発行していた農民向けの新聞「闘う農民」は、彼の提案によって発行することになり、殆んど彼が単独で編集、印刷、発送をしていたのである。

その時、彼が「安さん（山口安二）に話したのか？」と訊ねたので、これから話そうかと思っ  
ていると言うと、

「オレから話せば、加わると思うが、あんなこと（広告取り）をしているので、捕まる恐れがあ  
るから、今は話さない方がいいと思う」と言ったので山口に話すのは中止した。

田所とは私は未だそれほど親しくはなかった。自協の書記をしていたが、自連に復帰してから  
は自連の書記となって、主として江東地区の組合の仕事をしていった。梅本も全国自連の書記だっ  
たから、田所の説得は梅本にたのんだ。そして田所も入党した。

これと前後して、解放文化連盟の木原実と尾村幸三郎が入党した。三井利員はこれより前に入  
党していた。

全国自連と日本自協とは一九三四年一月一日付で合同声明書を発表した。そして三月合同大会  
を開催することになった。新しい全国自連のなかには、最も強力な党組織を確立しておく必要が  
あった。これが党員獲得に積極的に動くことを決めた理由の一つであった。

全国自連の第四回合同大会は、三月十八日東京の芝浦会館で開かれた。議長に大塚貞三郎を選  
んで議事にはいった。しかし山田健介が起草した運動方針書は全部警視庁に押収されてしまっ  
たので審議できず、代表者会議で討議することになった。綱領は廃止して、当面の行動綱領と新規  
約を決定した。

大会終了後、人事を決定し、梅本英三（東印）を代表とし、書記は山田健介、三井利員（東  
印）、連絡委員は各組合から一名ずつを出すことにきめた。そして新全国自連は産業別組合の連  
合体とし、

関東労働組合自由連合会

東京印刷工組合

東京金属産業労働組合

東京地方使用人組合

関東一般労働者組合

関西労働組合自由連合会

大阪自由総合労働組合

関西金属産業労働組合

遠江印刷工同工会

中部黒色一般労働組合

岡山一般労働組合

との組織を確認し、帝国主義戦争反対、ファシズム粉砕を主要な闘争方針としたのである。

党綱領などの作成のための第一回の会合は一九三四年八月尾村の斡旋で西銀座のキューベルと

いう喫茶店の二階を借りて開いた。植村が議長になった。そして次の通り決定した。

- 一、権力政治及資本制の廃止。
- 二、完全なる地方自治制の確立。
- 三、私有制の廃止。
- 四、生産手段及び土地の共有。
- 五、賃銀制度の撤廃。
- 六、労働者農民による生産管理。
- 七、教育、文化の享有。
- 八、人為的国境の撤廃。

この綱領は言うまでもなく、われわれが当時理解していた無政府共産社会の簡単な図式であった。不十分なものであることは否めないとしても、党が建設しようとした社会がどのようなものであったかは理解されると思う。

次いで行動綱領を討議して次の通り決定した。

- 一、資本制の廃止。
- 二、議会の解散。
- 三、十八才以上の男女の選挙権獲得。

- 四、言論、出版、集会、結社の自由。
- 五、一切の労働者農民暴圧諸法令の撤廃。
- 六、賃金低下に依らざる労働時間の短縮。
- 七、政府資本家負担の失業保険。
- 八、耕地の無償獲得と生産費及び飯米の国庫負担。
- 九、一切の租税の資本家地主の負担。
- 一〇、資本主義教育の撤廃。
- 一一、戦争の危機に対する闘争。

この日はこれだけを決定して散会した。今回は規約を作成するために、植村と入江とが原案を作成してやることにきめた。

今回は入江の家で開かれた。ところが、植村も入江も規約の原案を作っては来なかった。綱領、行動綱領を作成した時と同じように自由に発言して、異議のなかった項目を列挙してそれを後に修正したり、順序を改めたりして、作って行くことにした。こうして規約にもるべき項目は列挙されたので、これを入江が条文化して改めて中執に提出することをきめたが、入江は遂に中執に原案を提出しなかった。だから、厳密に言えば規約は作られなかったことになるが、規約にもるべき思想は中執で決定したのであった。

党の最高機関は大会であるとした。大会から次期大会までの最高の意志決定機関として中央委員会を置くことにした。大会決定の執行機関は大会が選出した中央執行委員会であって、委員会の最高責任者として委員長を置くことができることと決定した。中執の任務を分担するために、政治局、組織局、軍事局、財政局を置き、各局の連絡と調整のために書記局を置いた。他に主としてテロ活動のために特務機関を置いた。軍事局と特務機関とは重複するように思われるだろうが、軍事局の主たる任務は、軍隊の反乱を組織するための宣伝煽動活動であった。そして軍事局と特務機関の責任者は兼務することを禁止した。この両者は常に武装している筈だからであった。各地方には地方委員会を置いて、その地方の党活動を指導することとした。党の基礎は細胞であって、工場、農村、都市におくことにした。これとは別に、他団体のなかの党員は別働隊として組織することにした。いわゆるフラクションである。

森長英三郎氏が『法学セミナー』に発表した「日本無政府共産党事件」のなかに規約第二四条に「故意に党の秘密を漏洩したる者は死刑に処す」という条項があったと書いているが、氏は裁判記録に基づいて書かれたものと思われるので、あるいは裁判所は入江の草案を押収していたのかもしれないと思う。このような意味の条項を決めたことは確かである。それはスパイに対する報復手段と共に、同志を逮捕した官憲に対しては必ず報復しようと考えていたからであった。<sup>(注16)</sup>

また森長氏はこの規約に関する意見が、著しく共産党に近いとして植村が怒って退席したと書

いているが、記憶が薄れたためか、植村が途中で退席したことは記憶していない。あるいは彼がそのような意味で退席したと気付かなかったたので、彼の中途退席を意に介さなかったたので忘れてしまっているのかとも思う。

委員長は最年長の故をもって、全員は植村を推せんし、彼は受諾したのである。

植村は詩人として知られていたから、党などの委員長としてはふさわしくないように思う人がいるかもしれないが、彼は白熱し、激昂する激論のなから結論を引き出すことは誰よりも上手だった。彼の説教するような説得には一種の風格があった。

中執のなかで最も強力に中央集権組織を主張したのは入江であった。それは二見だったろうと思えるだろうが、入江の方がその点では徹底していた。入江は議論にはあまり激昂することなくむしろ冷静な男だったが、酒を飲むと暴れる悪い癖があった。腕つぶしの強さから来る自信もあったのだろう。ムーラン・ルーシュで大喧嘩をして顔を幾針も縫うほどの大怪我をしたことがあったが、彼は電車から押し出されて落ちたのだと言って、それで押し通していた。その頃の東京市電には出入口に扉のない電車が多かった。とにかく陰湿な喧嘩はしない男だったから憎めなかったたのである。

中央委員には梅本と田所を推すことにした。